

## 退職のご挨拶

前センター長 館野和己



2016年3月31日をもちまして、奈良女子大学を去ることになりました。2004年4月より5年間にわたる文部科学省の21世紀COEプログラム（革新的学術分野）「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」では、多くの皆さんに助けられて多彩な研究活動を展開できました。そして2005年の6月に、それと連携して活動し、かつプログラム終了後には、その活動を引き継ぐべき組織として古代学学術研究センターが正式に発足しました。

2009年3月末でCOEプログラムが終了すると、当センターは活動を本格化させました。私は同年6月に松尾良樹氏の後を受けてから、2015年3月に山田和久氏に引き継ぐまで6年弱、センター長の職を務めさせていただきました。

この間、考古学・地理学・文学など、私の専門とする日本古代史にも関係する分野のみならず、COEプログラムの成果を単に継承するだけでなく、発展を図るべく新たにセンターの1分野になった、プロテオミクス研究の考古学への応用という、私にとって全く未知の世界にも触れられたことは、視野を広げることにつながり、たいへん幸せなことでした。

COE以来恒例となり共に10回を超えた、都城制研究集会と若手研究者支援プログラムの毎年開催、研究機関誌『古代学』と『都城制研究』の刊行、GISを用いた奈良盆地歴史地理データベースの構築と公開、月例研究会や研究会・講演会の開催、あるいはNewsletterのWEB発信、など、様々な活動を積み重ねてきました。これらはセンターに直接関わ

る多くの方々の努力のおかげであるとともに、学内外の諸機関・研究者の協力の賜物です。私が直接関係した都城制研究集会では、中国・韓国・ベトナムの研究者にも加わっていただきました。いちいちお名前が出しませんが、本当に関係者の方々のご縁で、ここまでやって来られたと感じるところです。ありがとうございました。

これらの活動によって、古代学学術研究センターが我が国における古代学研究の拠点の1つとして認知されるようになったと思います。人が替われば活動内容も自ずから変化していくことは避けられませんが、今後とも奈良にある大学のセンターとしてふさわしいテーマを取り上げ、新鮮で活発、そして刺激的な研究活動を繰り広げる拠点であり続けてほしいと願うところです。

なお、4月以降も特任教授としてセンター活動に関わることとなりました。今後ともよろしくお願いたします。

## シンポジウム報告

第10回都城制研究集会  
日本古代の都城を造る  
2015年12月19日（土）

第10回目を迎えた都城制研究集会を「日本古代の都城を造る」をテーマに開催しました。研究集会ではこれまで様々なテーマを取り上げてきましたが、今回はいわば初心に戻り、都城を造ること自体を問題にしました。都城の造営は、大きな財政負担と民衆の苦しみの元となるものでしたが、それでも天皇・為政者は、造都に多大なエネルギーを払ってきました。そこでは大規模な都城の設計方針がまず重大な問題となり、ついでそれに基づいて正確に、かつ組織的、効率的に造営することが課題となり、様々な困難を乗り越えて都城が完成しました。

そこで本研究集会で  
は、平城京・難波京・  
長岡京・平安京を舞台  
に、最新の発掘調査の  
成果に基づいて造営の  
諸問題に迫るとともに、  
萬葉歌からも探りました。  
報告者と報告タイトルは  
下記の通りですが、簡単  
に紹介し



第10回都城制研究集会での討論の様子

まず遷都の造営決定から遷都までの各段階で、何が課題になり、何がどう行われたかを整理した後（館野）、各都城の報告がありました。すなわち平城京右京における秋篠川の埋め立てと道路敷設工事、朱雀門前における造宮・京時の鍛冶工房（神野氏）、平城京における条坊道路と坪内宅地利用との関連、造営作業員の単位集団と働かせ方の復元（佐藤氏）、平城京左京における東堀河の掘削工事と東市・播磨調邸の設置（池田氏）、難波宮周辺の整地工事の様相、宮南門大路遺構などから見る難波宮・京の設計と京城（市川氏）、桓武の思想を反映した長岡京と平安京の様相（西森氏）についての報告と続き、最後が『萬葉集』の歌に見える宮殿の屋根への注目と、藤原宮の役民の歌と御井の歌の読み込み（奥村氏）でした。

新たな発掘調査成果に基づく報告からは、都城の造営についても論ずべきことがまだ多くあることを感じさせました。参加者は約180名に上りました。今回の開催にあたっては、学内外の多くの研究者・機関のお世話になりました。報告者をはじめシンポジウム開催にご尽力いただいた関係者の方々、それに共催団体となっていた大阪文化財研究所と奈良文化財研究所に、感謝申し上げます。本研究集会の報告内容は、『都城制研究(11)』（2016年度刊行予定）に掲載する予定です。

**報告**

- 日本古代都城の造営一問題提起として  
館野和己（奈良女子大学）
- 平城宮周辺の造営工事  
一佐伯門前と朱雀門前の事例から  
神野 恵（奈良文化財研究所）
- 平城京造営と造営集団について  
佐藤亜聖（元興寺文化財研究所）
- 平城京東市の造営と東堀河の掘削  
池田裕英（奈良市埋蔵文化財調査センター）

**難波宮・京の設計と実際**

- 市川 創（大阪文化財研究所）
- 長岡・平安宮の造営の実態  
西森正晃（京都市文化財保護課）
- 『萬葉集』にみる都造り  
奥村和美（奈良女子大学）
- 討論 司会：出田和久（奈良女子大学）  
前川佳代（古代学学術研究センター）

**共催**

- 公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所
- 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所  
（館野和己）

第11回若手研究者支援プログラム  
**日本霊異記を読む**  
2015年8月23日（日）～24日（月）

第11回若手研究者支援プログラムが2015年8月23日と24日の2日間にわたり、古代学学術研究センター主催、奈良県立万葉文化館との共催で開催されました。第1日目は、日本最初の仏教説話集である『日本霊異記』を歴史学や古代日本語学の観点から見つめ直しました。第2日目は、若手研究者による研究発表を、各テーマ専門の講師による公開



公開講演会で講演される乾 善彦氏

指導方式にて行いました。のべ約 210 名参加。

### 第 1 部 公開講演会「日本霊異記を読む」

8 月 23 日(日) 於 奈良県立万葉文化館

約 150 名参加。

『日本霊異記』に見える交易と銭

館野和己(奈良女子大学教授)

日本霊異記から三宝絵へ

乾 善彦(関西大学教授)

### 第 2 部 若手研究発表会【公開指導方式】

8 月 24 日(月) 於 奈良女子大学 約 60 名参加。

倭建命譚と「剣」試論

岩田芳子(日本女子大学助教)

講師 上野 誠(奈良大学教授)

建波邇安王の反乱一幣良坂の少女の歌を中心に—

山口直美(明治大学・院生)

講師 荻原千鶴(お茶の水女子大学教授)

顕昭の歌学における「日本紀」の位置付け

鎌田智恵(京都大学・院生)

講師 乾 善彦(関西大学教授)

大伴家持越中時代挽歌について一書持挽歌を中心に

長内遥香(奈良女子大学・院生)

講師 山崎健司(明治大学教授)

万葉集におけるク語法と準体句の意味論的差異

—動詞述語文の目的格に立つ場合—

向井克年(福岡大学・院生)

講師 内田賢徳(京都大学名誉教授)

(奥村和美)



若手研究発表会【公開指導方式】のようす  
岩田氏の発表に対しコメントする上野誠氏

## 研究会報告

### 古代学学術研究センター 月例研究会

本センターに参加している学内外の様々な学術分野の研究者が相互の研究内容を理解し、学際的研究

を推進する基盤を作るために、月例研究会を開催しています。2015 年度は次の通り開催しました。

5 月 13 日(水) 森 由紀恵(センター協力研究員)

『覚禅鈔』にみる密教聖教の知の構造

6 月 3 日(水)

岩田茂樹(奈良国立博物館・センター特任教授)

東大寺・僧形八幡神像の再検討

7 月 1 日(水) 尾山 慎(研究院人文科学系)

古代日本の文字と表記

9 月 30 日(水) 楊 莉(センター協力研究員)

敦煌書儀にみえる「相迎書」についての再考

11 月 11 日(水) 上野邦一(奈良女子大学名誉教授)

鞠智城の八角形遺構について

2016 年 2 月 15 日(月)

西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所・センター特任教授) パルミラ遺跡の過去と現在

## 講演会報告

### パルミラ遺跡の過去と現在

西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所  
・センター特任教授)

2016 年 2 月 15 日(月)

第 6 回月例研究会は特別講演会「パルミラ遺跡の過去と現在」として、最近 IS により破壊されたパルミラ遺跡について長く調査に携わってこられた、センター特任教授の西藤清秀氏にご講演いただきました。

シリア沙漠の中央に位置するパルミラ遺跡は、シルクロードの隊商都市として紀元前 1 世紀から紀元後 3 世紀にかけて繁栄し、その姿を今に伝えていました。しかし 2015 年 5 月、IS がパルミラへ侵攻してから 3 ヶ月、2000 年にもわたり人々が守り抜き、後世に伝えようとした遺産が次々と爆破され、破壊されていきました。

講演では遺跡破壊の実態等につき、シリア政府や古物博物館総局職員による文化遺産保全や破壊・盗掘被害のモニタリングなどの活動が続けられていることが紹介されました。そして、日本西アジア考古学会が主催したシリア考古学会議(2015 年 12 月 3～6 日)をはじめ、各国の調査隊の成果共有や遺跡のレーダー計測や記録技術の提供など国外組織による支援の現況についてお話がありました。文化遺産とこれを守り後世に伝えることについて改めて考える機会となりました。(宮崎良美)

## 調査報告

### 対馬・北九州の古代山城調査

上野邦一（奈良女子大学名誉教授）

2016年3月21日～23日の3日間、対馬・北九州の古代山城・神籠石などを踏査した。参加者は出田センター長、館野教授、上野の3名。古代山城は、熊本県北部山鹿市にある鞠智城にしか行ったことがなかったから、私にとって古代山城というものを踏査したのは初めてに近い。その鞠智城での遺構を論文に取り上げたのがきっかけとなり、対馬・北九州の古代山城・神籠石を踏査する機会を得たのである。

行程は1日目：福岡港を朝出港し対馬厳原港着。到着後、宿に荷物を置き金田城へ。午後、数時間金田城を踏査。夕方宿へ戻る。

2日目：厳原港を朝出港し、福岡港到着後大野城へ向かう。午前大野城踏査。午後基肆城へ向かい踏査。夕方、小倉の宿に入る。

3日目：午前は鹿毛馬神籠石、御所ヶ谷神籠石を踏査し、豊前国分寺、みやこ町博物館に立ち寄る。午後、豊前国府跡、大ノ瀬官衙、唐原山城を訪れた。踏査後、帰途につく。

さて、対馬へ渡るのは初めてではない。城下町である厳原の武家屋敷地や、同島にある石葺屋根の倉庫などを見学するために数年前に訪問したことがあったからである。今回は金田城を踏査した。また、北九州も、何度か足を運んでいる。ただし、この地域で見学してきたのは、町並み、民家、社寺である。以下、今回踏査した遺跡の所見を報告する。

**金田城** 厳原から北10kmほどの位置で、標高270mほどの城山にある。麓から、谷や尾根を上り下りしながら、主な遺構を踏査する。

金田城内で複数の“柵列”と表示する遺構があった。これらの遺構は、建物の周囲にあり、建物本体の柱穴よりも小ぶりで、かつ柱筋が通らないので“柵列”と判断したと推察される（写真1）。しかし、



写真1 金田城南門付近の遺構

遺構表示を見る限り、建物を囲う柵は不要か意味をなさないと思われ、再考が必要である。私は差し掛け屋根のようなものではないだろうか、と考えた。建物本体がしっかり固定していれば、その周辺に簡単に柱を建て、差し掛けの屋根を造り、本体と一体となって機能する構築物を造ることは容易である。簡易な構築物であれば柱筋を通す必要はない。

山城とは直接関係がないが、北側にある大吉戸神社に行った。本殿の軸線に、アプローチを設けることが出来た、と思われるのに、船付き場から参道を経て本殿へ至るアプローチが、折れ曲がっている。神聖な区画に直接向き合わない、何らかの理由があるのでは、と考えさせられた。

**大野城** 大野城市の東、太宰府市の北の丘陵地にある。8カ所で礎石群が発見されているほか、9カ所の城門が分かっている。整備が進んでいて、ハイキングをする人々に多く出会った。

礎石群の内、表示してある礎石が原位置を保持しているとするなら、増長天礎石群のうちの一棟が気になった。柱筋以外の1カ所で、すなわち建物の柱には考えにくい箇所で礎石があるのである。いわば余分な礎石があることになり、直感的に言えば祭祀に関わる可能性がないかと、問題を感じた。

**基肆城** 大野城の南10数kmにあり、標高400mほどの基山を利用して築城されている。

南門を見学した（写真2）。整備されていて、谷の下流部分に石垣を築き堰き止めて、石垣の下部に暗渠水路を設けていた。一旦崩れたようで、修復されていて半分ほどが当初の石垣らしく比較的大きい石を隙間なく積んでいた。



写真2 基肆城南門

山城全体にはハイキングコースのような山道が整備されていたが、案内地図にあるような建物の礎石群は視認できなかった。遺跡のうち大型建物と言う礎石群があり、後日資料を確かめることとした。

**神籠石** 今回、はじめて神籠石と呼ばれる遺構を踏査した。飯塚市の鹿毛馬神籠石、行橋市の御所ヶ谷神籠石などである。前述の大野城太宰府口城門や基肄城の水門などでの石積を見、神籠石の石列・石積を見て渡来人の石積技術を認識できた。

鹿毛馬神籠石 水門、石列を見学した。遺跡内かどうか確実ではないが、直近に鉄塔があるのが気になった。

御所ヶ谷神籠石 中門が良く残っていて、整備されていて見応えがあった。今回見てきた城門・門の遺構に共通して、谷の下流部分を堰き止めるように石垣を築くが、ここは2段に石垣を築いていた。暗渠水路も設けている。視認は出来なかったが、案内パンフレットによると、土塁には版築が高さ2mほど、70～80層が認められ、その底部に石列があり、かつ施工過程の柱穴が多数あった、という。ほかの古代山城の土塁建設の参考になり、興味深かった。

**唐原山城** 福岡県の東海岸の県境近く上毛町にあり、標高84mほどの山を利用して築城している。水門3カ所のほか土塁が見つかる。

水門のうち第1水門1基を見学した。第2、第3水門や土塁などは所在が視認できなかった。

**豊前国分寺・豊前国府・大ノ瀬官衙** 古代山城・神籠石のほかに、豊前国分寺、豊前国府、大ノ瀬官衙を踏査した。

豊前国分寺の講堂跡、豊前国府、大ノ瀬官衙などは整備されていて、遺構の表示があった。遺跡の整備は、専門家だけでなく、多くの人々が遺跡を理解する上で必要な措置である。しかし、遺構の表示・説明は研究に依拠した正確なものでなくてはならないだろう。正確でない表示・説明は、遺跡の誤ったイメージを伝えることになるからである。2つの気付いた点を述べておく。

1つ目は、前述のとおり、金田城の“柵列”と説明している遺構で、この遺構は建物と一体となった構築物だろう。2つ目は、豊前国府の東脇殿である（写真2参照）。豊前国府跡は整備されて遺構表示されている。説明版には、東脇殿は西庇付きとあったが、この解釈・表示に疑問がのこった。梁間長さは5mほどであり2間と考えても良く、東脇殿は梁間2間・西庇付きではなく、梁間2間で、妻側を3分割する遺構の可能性がある。この場合、両端の空間へは妻側から入ることが考えられることを指摘しておきたい。



写真3 豊前国府跡の遺構（東脇殿）

**古代山城・神籠石の研究課題** 古代山城のいくつかを見学しただけなので、属性を普遍的に把握している訳ではなく、今回踏査した限りでの所見である。古代山城・神籠石は、小高い山に土塁を築き囲い、谷筋に門を開く。門の両側に石垣を築いて谷を塞いで防御し、その石垣の裾付近で内側からの水抜きの水路を暗渠にして設ける。石垣は、比較のおおぶりの石を積み上げ、石と石の間隙がないようにしているように思えた。

古代山城に関して研究課題が多いことを知った。古代山城のこれまでの調査・研究を精査していないが、古代山城では多くのいわゆる総柱建物を検出していて、倉庫と想定されているものの、山城の内部で、どこが中心部なのかは分かっていないようである。そもそも中心となる施設がない可能性さえある。しかし、古代山城にはすくなくとも数千人の兵士がいたと考えられ、そうだとすれば彼等を統率する長がいるはずで、兵士が生活する場、長が生活する場が同じとは思えない。中心施設が確認された古代山城は、管見するかぎり分かっていないようである。

各山城の、正確な地図とそこに発見された遺構を配置した図の必要性を感じた。こうした基本資料が

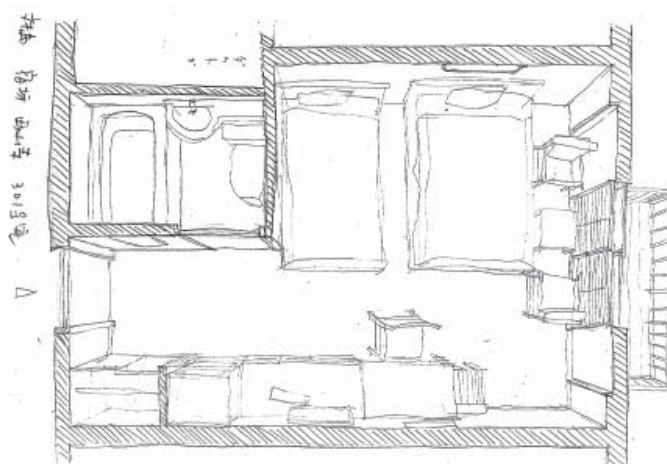


図 対馬 西山寺宿坊 301号室

ないと、古代山城相互の比較研究はできないからである。

**余談** 対馬では、宿坊西山寺に宿泊した。禅宗寺院で40年ほど前からユースホステルを開き、数年前に増築・改装して宿坊をオープンした、という。外国旅行では、宿泊する部屋の図面を採取するが、国内では宿泊する部屋の図面は採取しない。国内の宿泊では、定型的な部屋が多く、魅力的でないからである。今回の西山寺では、広く快適な部屋であったので、国内で久しぶりに部屋の図面を採取した(図)。

### 学際的共同研究体制に基づく タンパク質考古学創成事業との連携

研究会「出土人骨のコラーゲンおよび彩色文化遺産に用いられるタンパク系膠着材料のプロテオミクス分析について」報告

中沢隆 (研究院自然科学系教授)

2016年3月29日(火)  
於・筑波大学東京キャンパス文京校舎

平成27年がプロジェクトの最終年度となる「学際的共同研究体制に基づくタンパク質考古学創成事業」では、これまで国内外の考古学資料中に残されたコラーゲンをはじめとするタンパク質の分析と構造解析を行ってきました。今回の研究会は、連携研究協定先の筑波大学の谷口陽子先生からの提案で、最新の研究成果である「出土人骨のコラーゲンおよび彩色文化遺産に用いられるタンパク系膠着材料のプロテオミクス分析」について集中的に議論するために開催しました。この長い題名にふさわしく、午後1時半から5時までの間を、報告者の私(中沢)と世話人の谷口先生で何とか乗り切らないといけません。出席者は少数の専門家に限り、奈良女子大から鈴木孝仁、宮路淳子の両先生、大阪大学からは一昨年末まで古代学学術研究センター特任助教だった河原一樹先生が参加しました。場所は筑波大学東京キャンパス文京学舎で、地下鉄・茗荷谷駅を挟んでお茶の水女子大学の反対側にあります。科研費新学術領域研究「現代文明の基層としての古代西アジア文明」の研究代表者である筑波大学の常木晃先生をはじめ、前述の谷口先生と国立西洋美術館や国立歴史民俗博物館、東京芸術大学などの研究者を合わせて10名余りが関東地方からの参加者でした。

初めに「タンパク質考古学」の概要を説明した後、筑波大学グループから提供されたイランのサンギ・

チャハマック(Sang-e Cakmaq)遺跡(紀元前5,000~7,200年)から発掘された人骨と、アフガニスタンのバーミヤン渓谷の岩壁に彫られた2体の大仏の彩色壁画片について、分析結果を報告しました。2001年に破壊された大仏の壁画片からは、膠着材に使用されたと見られる膠のコラーゲンの他に、牛乳のカゼインが検出されました。今回の研究会は、今年の6月5日からのアメリカ質量分析学会(テキサス州・San Antonio)で“Mass spectrometry of collagen and casein in the remains of the 5th to 7th century Bamiyan Buddhas”と題する発表内容の検討会も兼ねていて、「なぜ千年以上昔の牛乳のタンパク質が腐りもせずに残っていたのか」とか、「ウシではなくヤクの乳の可能性はないのか」など、3時間半にわたってほぼ休みなしで議論が交わされました。古代の骨についても同様の議論をしているうちに終了予定時刻の5時を過ぎてしまいました。

これまで、タンパク質考古学のプロジェクトでは記念館や大講義室で一般向けのシンポジウムを年に数回開催して情報公開と研究のネットワークの拡大を図ってきました。また、研究成果は国内外の学会を発表の場としていましたが、研究方法の検討や結果の吟味などに、学外の研究者と今回程充実した議論をする機会はありませんでした。平成28年度からはタンパク質考古学の研究は古代学学術研究センター内の環境歴史科学分野に引き継がれます。その中で、今回のような研究会はこれからも是非続けていきたいと思っています。

### 後援事業報告

離れた人に伝えたい—くらべてみよう、  
今のメールと奈良時代の“メール”

2015年7月24日(金) 於・奈良女子大学

当センター後援のもと、日本学術振興会による小・中・高生のためのプログラム、「ひらめき☆ときめきサイエンス~ようこそ大学の研究室へ~KAKENHI」を去る7月24日(金)に実施しました。

このプログラムは科研費を受けて遂行されている研究の成果を、小中高生を対象として紹介するためのもので、それと同時に子供達に大学生活を経験してもらうことを目的として実施されます。

今回、当センターでは協力研究員の黒田洋子が企画した「離れた人に伝えたい—くらべてみよう、今のメールと奈良時代のメール—」と題するプログラ



「離れた人に伝えたい」 午前の部のようす

ムを実施して、古代の史料に触れる機会のない子供達に、史料に触れる機会を提供しました。

子供達にとって歴史とは、社会科の授業で学習する、暗記中心で受け身の科目となっているのが現状です。そこで歴史を解明するには、科学の諸分野と同様、観察に基づいた研究を行っていることを体験してもらおうがこのプログラムの狙いです。

午前は本学コラボレーションセンターにある、フロリングの多目的セミナー室で、車座になって書状の写真パネルを実際に手に取りながら観察。その後気づいた点などを発表し合って比較・検討しました。午後はバスで奈良文化財研究所に移動し、木簡が発掘されてから保存されるまでの過程を見学。ちなみに奈良文化財研究所においても子供達を対象に木簡を直に見学させる催しは初めての試みでした。



午後の部のようす  
(於・奈良文化財研究所)

今後当センターでの研究成果の中から子供達へ、実際に史料に触れる機会を発信することができれば幸いです。

(黒田洋子)

## 地域貢献に関わる活動

### 奈良県県土マネジメント部砂防・災害対策課への「小字データベース」データ提供について

古代学学術研究センターでは、奈良県内の砂防指定地の管理を担当する奈良県県土マネジメント部長

からの協力依頼に応じて、2015年8月21日に同部砂防・災害対策課長との間で「奈良盆地歴史地理データベースのデータ受渡及び使用に関する協定書」を締結し、10月27日、同データベースのうち「小字データベース」の電子データの提供を行いました。

一般的にデータベースは構築に多くの労力を要しますが、本例のように学術研究だけではなく、当初予想していなかった、行政機関による防災施策などにも活用され、さらに県費の節約にも結びつくなど、多様な活用の可能性があり有用であることが改めて認識されました。

(宮崎)

協力依頼要旨 奈良県における砂防指定地は明治時代に小字名を表示して指定された箇所が多く、区域の管理を文字情報のみにより行っている箇所があります。昨今は、GIS（地理情報システム）に代表されるように防災分野でも活用されている様々な技術の進歩が著しく、砂防指定地についても可能な限り地図上で表示することができるGISを活用した管理を推進する必要があります。

奈良女子大学古代学学術研究センターでは、小字名や小字界を調査した『大和国条里復原図』（1981年刊行、奈良県立橿原考古学研究所編）を主要資料として、学術的な見地からGISを活用し、「奈良盆地歴史地理データベース」を構築されているものと伺っております。

つきましては、砂防指定地について地図上で管理することを推進するため、同データベースのうち、小字に関する電子データの当県県土マネジメント部砂防・災害対策課へのご提供及び本件に関係する助言その他の必要なご協力をお願いします。

## 協力研究員の活動から

当センターでは日本史や文学・国語学を中心に多様な研究テーマをもった研究者を協力研究員として受け入れ、毎年着実に研究成果が蓄積されています。今年度の協力研究員について①専門分野、②センター受け入れ研究課題、③主な研究成果（②の課題に直接的に関連するもの）を中心に紹介します。（氏名五十音順）

黒田洋子①日本古代史 ②書状文化の源流を求めて—正倉院文書から見た日本古代における書状文化の諸相 ③「奈良時代の書状データベースをめぐって」（第21回公開シンポジウム「人文科学

とデータベース」発表論文集)など。また、小中高校生向けセミナー「離れた人に伝えたい」を開催(6頁に開催報告)

**桑原祐子**①国語学 ②正倉院文書による日本語表記成立の解明 ③『上代写経識語注釈』(共著、勉誠出版)。「正倉院文書における文末の『者』」(『正倉院文書の歴史学・国語学的研究—解移牒符案を読み解く』和泉書院、近日刊行予定)。「正倉院文書注釈—造石山寺所解移牒符案(三の1)」古代学第8号など。

**阪口由佳**①上代文学 ②上代文学における表記と表現—生と死にかかわる場面を中心に ③「なぜ、神々は死ぬのか—『古事記』に刻まれる古代人の死生観」(『古代史研究の最前線—古事記』洋泉社)。「古事記中巻の神と天皇」(『萬葉語文研究第11集』和泉書院)など。

**鈴木明子**①日本古代史 ②古代都城と聖徳太子 ③「古代都城と聖徳太子—小墾田宮・斑鳩宮・斑鳩寺」(『日本古代のみやこを探る』勉誠出版)

**樽井由紀**①日本民俗学 ②温泉と信仰 ③「明治期の温泉の効能表現—伊香保温泉の事例から」(日本温泉気候物理医学会招待講演、2015年12月5日、於・奈良商工会議所)。「The benefit of Yakushi-Buddha in Onsen」(Travel and Tourism Research Association 2015 Asia Pacific Chapter Conference @Meiji University、2015年12月6日)など。

**樋口百合子**①上代文学 ②『歌枕名寄』の成立・継承・影響について ③「『歌枕名寄』の周縁／終焉：学習院大学附属図書館蔵彫蟲居写本『歌枕名寄』をめぐる」(『古代文学研究第二次』24)。「対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵『歌枕名寄』所収万葉歌の性格」(古代学第8号)など。

**久岡明穂**①日本近世文学 ②日本書紀の江戸期における享受 ③「曲亭馬琴『椿説弓張月』と『日本書紀』—「虬の珠」について」(広域古典研究会、2015年6月25日 於花園大学)。「続新斎夜語巻二の三「売茶翁再び笠叟が許に語る」(上方読本を読む会、2016年2月13日、於大阪大学)。

**前川佳代**①日本中世史・日本考古学 ②平泉におけるGIS(地理情報システム)の利用／奈良女子大学構内遺跡の考古学的検討 ③「平泉の馬場殿」(『古代日本のみやこを探る』勉誠出版)。「平泉の都市生活—都市と祭礼—」(『平泉文化研究年報』16)。「南都焼討と奈良女子大学構内遺跡—12世

紀外京北部の景観」(都城制研究10)など。

**森由紀恵**①日本中世史 ②日本古代末期～中世成立期の都市と宗教 ③「『覚禅鈔』データベースの構築」(第21回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集)。

**楊莉**①敦煌学・中国語学 ②敦煌書儀の注釈と研究 ③「敦煌書儀にみえる「相迎書」についての再考」(古代学学術研究センター第4回月例研究会、2015年9月30日、於・奈良女子大学)

## 刊行物案内

2016年3月、『古代学 第8号』および『都城制研究(10)』を刊行しました。

### 『古代学』第8号

「鞠智城の八角形遺構について」上野邦一／「日本列島出土カリガラスの考古科学的研究」大賀克彦・田村朋美／「鹿の枝角博物標本から分離されたカビ *Chrysosporium xerophilum* について—文化財保存の観点から—」鈴木孝仁・的場美帆・宮路淳子／「対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵『歌枕名寄』所収万葉歌の性格」樋口百合子／「正倉院文書注釈—造石山寺所解移牒符案(三の1)」桑原祐子／「嘉永三年巡見記録—「古梅園造墨資料」翻刻と解題(10)」的場美帆

### 都城制研究(10)

「平城京のその後—問題提起として—」館野和己／「文学に見る飛鳥のその後—『万葉集』を中心に—」井上さやか／「その後の藤原京—藤原宮京の退却過程—」山本 崇／「旧都の礎—平安後期和歌に見る平城京—」岡崎真紀子／「南都焼討と奈良女子大学構内遺跡—12世紀外京北部の景観—」前川佳代／「平城京から中世都市・奈良へ」佐藤亜聖／「その後の難波京」豆谷浩之／「恭仁京その後」森島康雄／「近世における紫香楽宮観」伊藤誠之

奈良女子大学古代学学術研究センター

Newsletter No. 8

2016年3月31日発行

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 205号室

TEL/FAX: 0742-20-3779

URL: <http://www.nara-wu.ac.jp/kodai/index.html>

e-mail: [kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp)

編集: 出田和久・宮崎良美